

# 自立した主権者 をめざして

▶ ▶ ▶ 最終回 遠い戦争を、遠いままにしないために  
— 情報の時代を生きる私たち

## KEYPOINT

- あなたは社会的な課題について日ごろ考えていますか？
- また、考えていることについてどんな活動をしていますか？

## SUMMARY

遠い国の戦争は、私たちにとって無関係の出来事のように感じられがちです。しかし現代では、戦争は武器だけでなく情報によっても形づくられます。あふれる情報の中で、何を信じどう受け取るかは私たち一人ひとりの選択です。立ち止まり考える小さな姿勢こそが、情報の時代を生きる主権者の第一歩と言えるのではないのでしょうか。

## お知らせ

機関紙「日本再生」1面論文について、構成や流れや受け止め方等をコメントする場を YouTube チャンネルで配信しています。毎月配信しますのでニュースと併せてご視聴ください。



会では、遠い出来事が完全に無関係でいられるわけでもなくなっているように思います。戦争は軍隊だけが行うもののように見えますが、その背景には政治や世論があり、国際社会の空気があります。そして、その空気をつくるものの一つが、私たちが日々受け取っている「情報」なのです。

## 遠い戦争という感覚

ニュースをつけると、遠い国の戦争の映像が流れてきます。瓦礫の街、煙の上がる空、避難する人々。私たちはそれを見ながら、「大変なことが起きている」と感じます。しかし同時に、どこか遠い出来事のようにも思ってしまう。地図の向こう側で起きている、私たちとは関係のない出来事のように感じてしまうのです。

現代は、世界の出来事が瞬時に届く時代です。テレビだけでなく、スマートフォンを開けば、海外のニュースも、現地の映像も、個人の発信も、次々と目に入ってきます。昔に比べれば、私たちは世界の出来事に触れる機会をはるかに多く持っていると言えるでしょう。

それにもかかわらず、不思議なことに、戦争はどこか「遠い出来事」のままであることが多いのではないのでしょうか。ニュースを見て驚き、悲しい気持ちにはなりません。しかし、しばらくすると日常の忙しさの中に戻り、その出来事はまた画面の向こう側へと遠ざかっていきます。

もちろん、それは無理もないことです。私たちにはそれぞれ生活があり、仕事があり、家庭があります。遠くの出来事に心を寄せ続けることは、簡単なことではありません。けれど同時に、現代の社

## 情報が戦争の風景を形づくる時代

現代の戦争は、武器だけでなく情報とともに進んでいきます。何が起きているのか、誰が正しいのか、どの国が悪いのか。そうした物語は、テレビや新聞だけでなく、インターネットや SNS を通して瞬間に広がります。

私たちは日々、多くの情報に触れています。ニュースの見出し、短い動画、誰かの意見、専門家の分析。気がつけば、ある出来事について「なんとなくの印象」が自分の中に出来上がっていることがあります。

しかし、その印象がどこから来たものなのかを、私たちはどれだけ意識しているのでしょうか。たとえば、強い言葉で語られた意見や、感情を揺さぶる映像は、強烈な印象を残します。繰り返し見聞きする情報は、いつの間にか「当たり前の前提」のように感じられることもあります。

戦争の時代には、こうした情報の力が大きく働きます。これは決して特別なことではありません。歴史を振り返れば、どの時代の戦争でも、人々の感情を動かす言葉や物語がありました。ただ、現代はその広がる速さと規模がまったく違います。ほんの数時間で、世界中の人々が同じ映像を見て、同じ言葉を読み、同じ印象を持つことも珍しくありません。

もちろん、すべての情報が意図的に操作されているわけではありません。しかし、情報が人々の感情や世論に影響を与える力を持っていることは確かです。だからこそ、現代の戦争を考えると、「情報をどう受け取るか」という問題は、決して他人事ではないのだと思います。遠くの戦争を個人の力で止めることはできません。しかし、情報をどう受け取り、どう考えるかという点については、私たち一人ひとりが関わっているとと言えるのではないのでしょうか。

## 情報の時代に生きる主権者として

こうしたことを考えるとき、「主権者」という言葉の意味を、少し身近に感じることがあります。主権者というと、選挙や政治の場面で使われる少し硬い言葉のようにも思えます。しかし、その意味は決して遠いものではありません。主権者とは、自分の社会のあり方について、完全に他人任せにするのではなく、できる範囲で関わろうとする人のことではないのでしょうか。特別な知識を持つ必要があるわけではありません。大きな声で意見を言う必要もありません。たとえば、ひとつのニュースを見たときに、「これはどういう背景があるのだろう」と少しだけ考えてみる。別の視点の記事も読んでみる。感情を強く揺さぶる言葉に出会ったときに、いったん立ち止まってみる。そうした小さな行動もまた、社会の中で情報と向き合う一つの姿勢だと思います。

こうした姿勢は、とても小さなことのように見

えるかもしれませんが。しかし民主主義の社会では、その小さな行動の積み重ねが、社会全体の空気を形づくっていきます。何を信じ、何を疑い、何について語り合うのか。そうした日々の選択が、やがて政治の方向にも影響していくのです。

遠い国の戦争を見ながら、私たちは無力だと感じる場合があります。確かに、個人の力は決して大きくありません。しかし、情報があふれるこの時代において、「どう受け取るか」を選ぶ力は、誰の手の中にもあります。

戦争の時代に必要なのは、強い言葉だけではないのです。むしろ、少し立ち止まり、ゆっくり考えること。急いで結論を出すのではなく、別の声にも耳を傾けてみる。その静かな姿勢が、社会の空気を少しずつ形づくっていくのではないのでしょうか。

遠い国の出来事を、ただのニュースとして眺めるのか。それとも、自分たちの社会の問題として少しだけ考えてみるのか。その違いはとても小さく見えます。しかし、情報の時代を生きる私たちにとって、その小さな違いこそが、主権者としての第一歩なのです。

文責 吉田理子

### 〈機関紙「日本再生」No.562 の内容〉

歴史的分岐点 21世紀の中道政治は可能か ● 3面/  
コラム/一灯照隅 ● 4-11面/困む会/歴史修正主義と  
排外主義/倉橋耕平・創価大学准教授 ● 12-19面/  
困む会/財政民主主義～財政と民主主義をつなぐとは/  
掛貝祐太・茨城大学准教授

一緒に  
考えてほしいこと

・私たちは、本当に『遠い戦争』として見ているだけでよいのでしょうか。

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。